

# 1. 景観形成の骨格

## ～ “水と緑の縁どり” と “人々の営み” が共生する景観の形成～

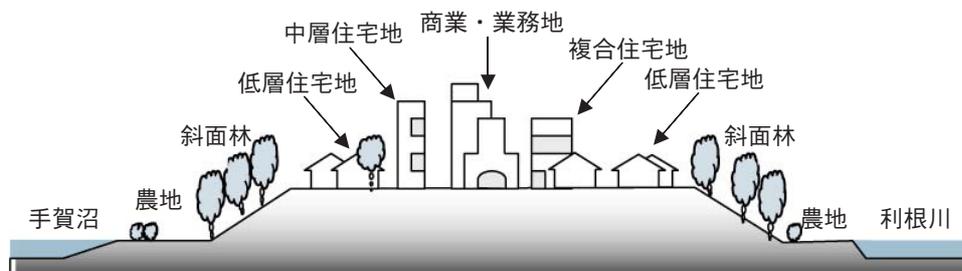
我孫子市の目指すべき景観形成の方向づけは、「広域的視点」と「地域的視点」、「まちの将来像」から導くことができます。

「広域的視点」からは、本市を含めた下総台地における地形的な特徴である谷津と水辺を有機的に結合させて景観形成を図ること、歴史・文化的には明治末期から昭和初期にかけて多くの文化人が残した遺産を活用した景観形成を図ることです。

「地域的視点」からは、一つは市街地を取り囲む、手賀沼や利根川、古利根沼の“水辺”と斜面林や田畑の“緑”の縁どり空間の景観形成を図ること。二つめは、住生活や商業・業務活動を行う“人々の営み空間”の景観形成を図ること。三つめは東西に長いまちの表情と時間の流れ(歴史・文化)を感じさせ、南北においては、市街地から水辺や水田などの身近な自然環境へと人々を誘導するような景観形成を図り、“東西・南北にあびこらしいまちの表情をつくる”ことです。

「まちの将来像」からは、手賀沼をシンボルとする水辺と緑の保全・育成、活用と魅力ある市街地の景観形成が求められ、“都市の中にゆとりと魅力的な表情をつくる”ことが導かれます。

地形的な特徴（断面）

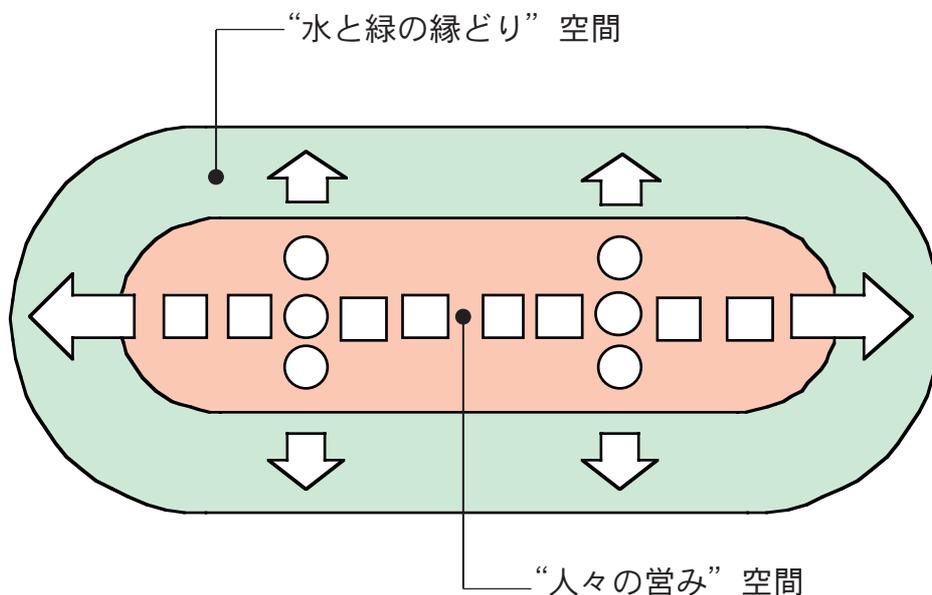


これらの方向づけの中でも我孫子の骨格を端的に表すものとして、次の二つを骨格とした構造となっています。一つは「水と緑の縁どり空間」で、もう一つは市街地にあたる「人々の営み空間」です。本市では、水と緑の身近な自然がうるおいのある環境をつくり、これらに包み込まれるように市街地が育まれ発展してきました。

しかしながら、都市化の進展とともに自然環境が減少しつつあります。景観形成を考えるにあたっては、自然環境(水と緑の縁どり空間)と都市環境(人々の営み空間)が互いにバランスのとれた状態を保ちながら、同時に都市の発展を促進するような景観づくりをしていかなければなりません。

このことから、～“水と緑の縁どり”と“人々の営み”が共生する景観の形成～を本市全体の景観形成の骨格とします。

### 骨格



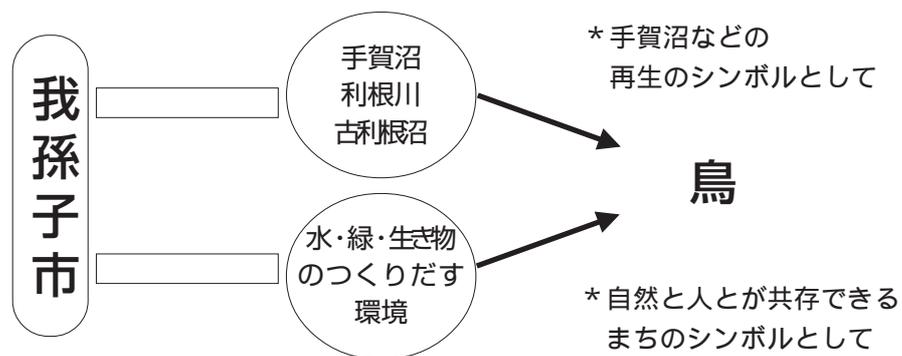
## 2. 景観形成の目標

「鳥にやさしい、暮らしを<sup>いろど</sup>彩る景観づくり・あびこ」  
 ～ “水と緑の縁どり” と “人々の営み” が共生する景観の形成～

### 1 指標（ものさし）

我孫子市の“水と緑の縁どり”の総合的な自然環境を保ち育成するため、“鳥”を指標とします。本市の自然環境を象徴するものは手賀沼です。現状における手賀沼は、一時に比べ汚濁が改善されつつあるものの依然汚れが目立ちますが、かつてはその情緒あふれる風景や澄んだ水面が本市を代表する自然・文化をつくり出し、多くの文化人が居をかまえました。このような手賀沼はもとより、利根川や古利根沼の良好な自然環境の状態を現す“ものさし”として水鳥の存在を挙げることができます。

一方、斜面林や寺社の森、市街地の身近な緑の育成状態のものさしとしても“鳥”の存在を挙げることができます。本市には、様々な緑がありますが、身近な生物(昆虫、鳥など)が育成できる緑の在り方が重要であり、本市の風土に根ざした鳥が生息できるような緑を育成するために“鳥”を緑の景観形成の指標として導きます。



また、“人々の営み空間”の景観づくりとして“暮らしを彩る”を導きます。地域の暮らしの中で培われ、育まれてきた歴史や文化は、今日のまちの中にも息づいています。また、新たに創造

され、姿を現している文化もあります。このような歴史や文化が日常の暮らしの中で「見え・読み取れる」ような景観づくりを目指して“暮らしを彩る”を景観形成の指標として導きます。

## 2 目標

以上のことから、市に住む人が自分のまちを誇りに感じ、住み続けたいと思えるようなまち、また訪れた人が再び来てみたいと思えるようなまち、本市ではそのようなまちをつくっていきたいと考え、本市全体の景観形

成の目標を『鳥にやさしい、暮らしを彩る景観づくり・あびこ』とし、“水と緑の縁どり”と“人々の営み”のそれぞれに対応させ、お互いに共生しあって、豊かな環境をつくりだしていくことを目指します。

### \* 我孫子市と鳥との関わり（手賀沼の例）

手賀沼の豊かな自然環境が本市の発展に大きく寄与してきたことは言うまでもありません。しかし、都市化と相まって、生活排水等による手賀沼の汚濁が進行し、大きな問題となりました。

そこで本市は手賀沼を再生するために、山階鳥類研究所を誘致及び鳥の博物館を設置し、鳥という身近な生き物をよりどころとして環境に対する市民意識の啓発に努めてきました。これらの経緯をふまえ、今後はさらに、手賀沼をはじめ、より総合的な自然環境を見つめる視点からあびこの景観を捉えていくことが求められています。

